

幸せの基準とは

辻 信一

明治学院大学教授
(文化人類学)



つじ・しんいち
1952年生まれ。99年、環境文化NGO「ナマケモノ倶楽部」を設立し、スローライフ運動を展開。著書に「幸せって、なんだっけ」「GNH」など。

未来を揺るがすに至った経済至上主義
「国民総幸福」掲げるブータンの教え

「GNPより、GNHの方が大事だ」とブータン国王当時(が言ってから30年余り、今ではGNH(国民総幸福)という言葉がブータン国の基本理念として憲法の中に書き込まれている。それは、世界中で宗教のよすが「信仰」さ

れてきた経済至上主義への痛烈な皮肉であり、批判だ。飽くなき「豊かさ」の追求は、貧富の格差、紛争や戦争、

欲望から降りる知恵

が健在で、若者男女を問わず

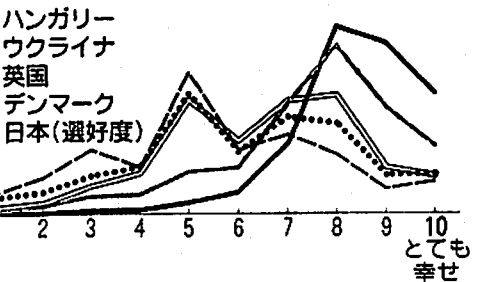
現代の経済学は「人間の欲

環境汚染などの深刻な問題を引き起こし、ついには人類の未来を揺るがすに至った。経済学が「富」と見なしてきたものは、未来に生きるはずの無数の人と生き物たちが享受すべき分を奪い取った。盗品の「山」だったのだ。では、少なくともその「豊かさ」を享受する日本など先進国の人々には幸せがもたらされたかといえは、必ずしもそうではない。いったい何のための「豊かさ」だったのか？

人々の幸福度は高そうに見える。豊かな自然、自給型農業、コミュニティの助け合い、人々が誇りとし、心のよりどころとする伝統文化……。人々はよく集い、歌い、踊る。子どもたちの楽しげで生き生きとした様子も印象的だ。

して来た。彼らは「足るを知ることの重要性を脱ぎ、欲求の暴走を自制することこそ真の知恵があるとした。現代の賢人である環境活動家、ヘレン・ノーバーク・ホッツが今月、「幸せの経済学」という新しい映画の公開に合わせて来日した。この映画で彼女は、世界のあちこちに出現しつつある新しい経済の試みを紹介している。それらの事例は、従来の常識とは反対に、地域(ローカル)化によって経済規模が小さくなるほど、人々の幸せ度が増すことを実証している。彼女によれば、それはローカル化がつながりを深めるからだ。人間同士、の相互扶助の関わり、人と自然との根源的なつながりが、よみがえるのだ。

「幸福か」の国際比較(日本と欧州4カ国)



2010年4月に発表した国民生活選好度調査より

国府が昨年発表した国民生活選好度調査によると、日本人の幸福度は10点満点中、平均5.5だった。15歳以上80歳未満の4000人対象で、2900人が回答。同様の調査を行う欧州各国の2008年の結果と比べると、マークや英国より低かった。男女別では、男のほうが幸福度が高く、年齢別は30代を境に年齢とともに低下した。

部から ■ 生に中国に第3位の高齢化の人口減少の時代は海外に指標をもつ「幸福度」を専門家がこの編集部へメールronnichi.co.jにします。

望は無限」という思いこみの上に成り立っている。そして、拡大し続ける欲望を満たすことが幸せであり、そのために限りなく物やサービスを生産し、消費し続ける。それが絶えざる経済成長を可能にする、というストーリーだ。

「上る」だけの人生観や歴史観はすでに破綻している。今求められるのは「降りてゆく」知恵だ。本場の豊かさは、「大の速く、より大きく、より多く」ではなく、「三つの「S」、スロー・スモール・シンプルで形容される生き方の中に見いだされるだろう。そう、ほんたうに幸せへと降りてゆくのである。

今東西の賢人たちが警告を発